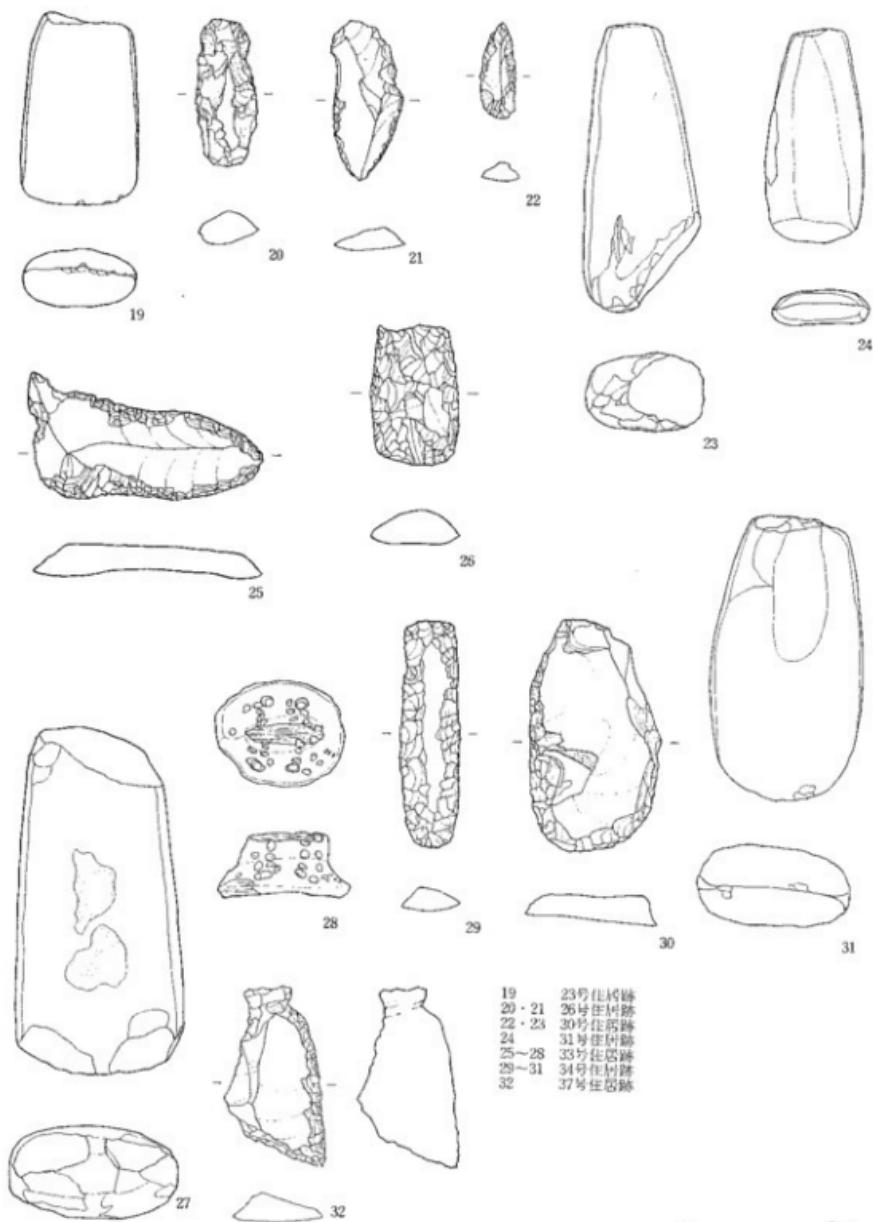
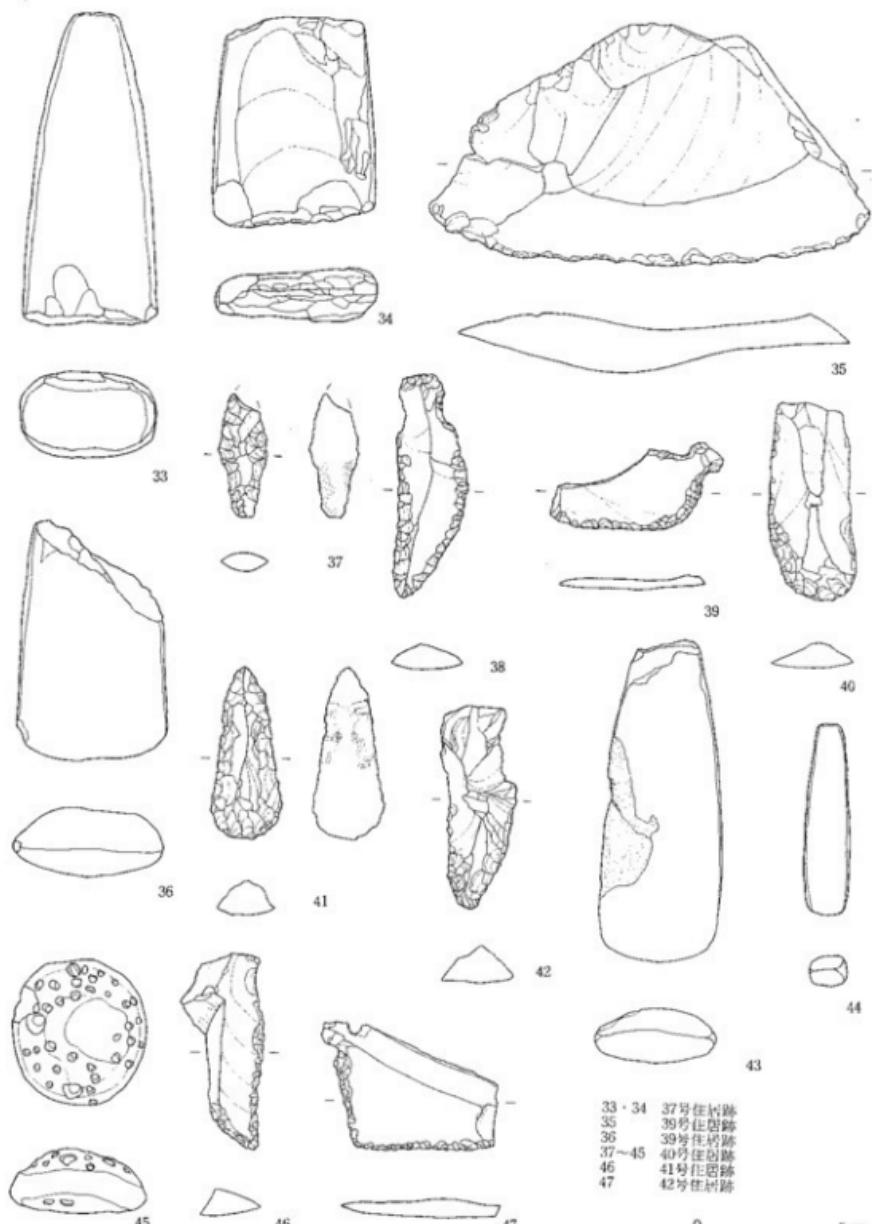


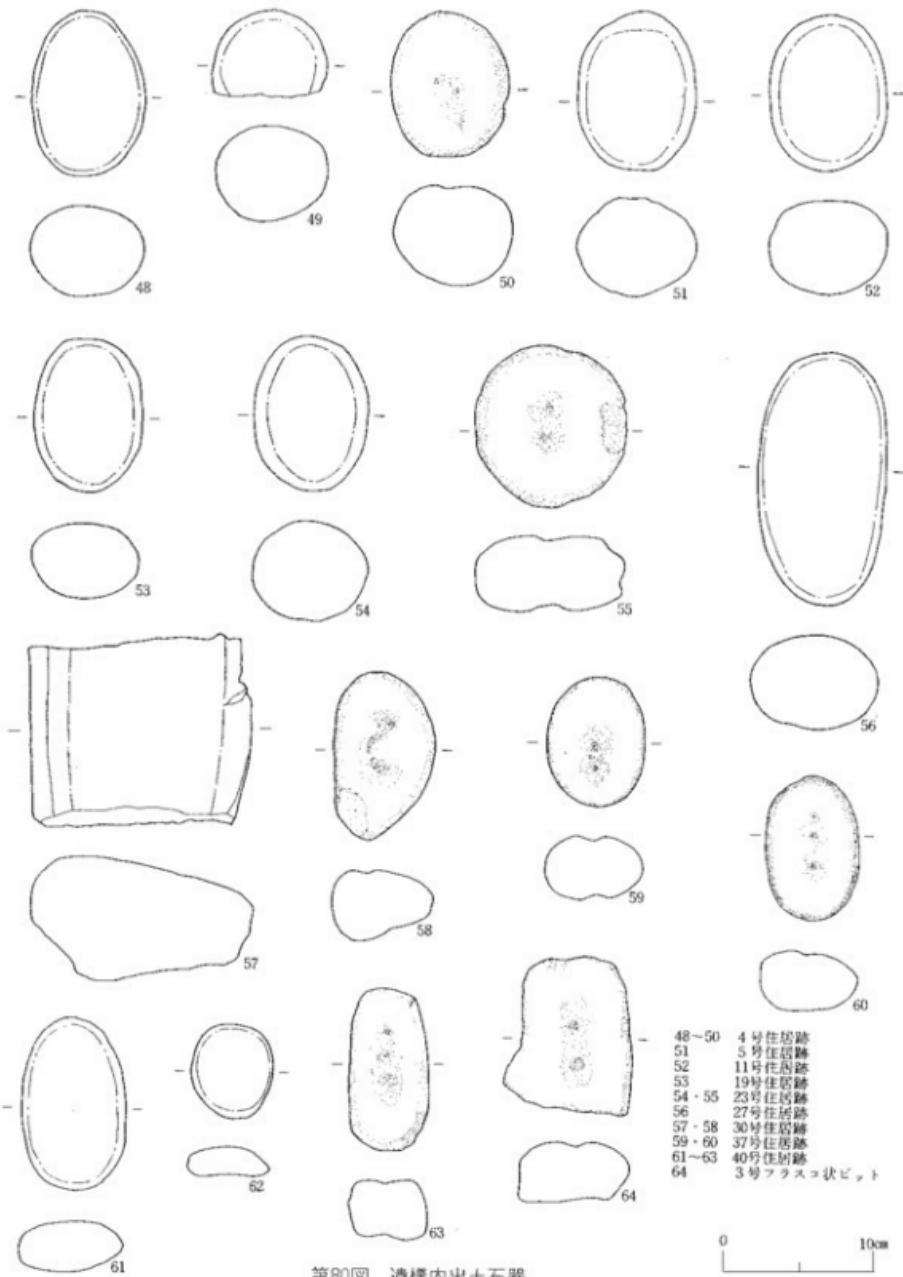
第77図 遺構内出土石器・石製品



第78図 遺構内出土石器・土製品

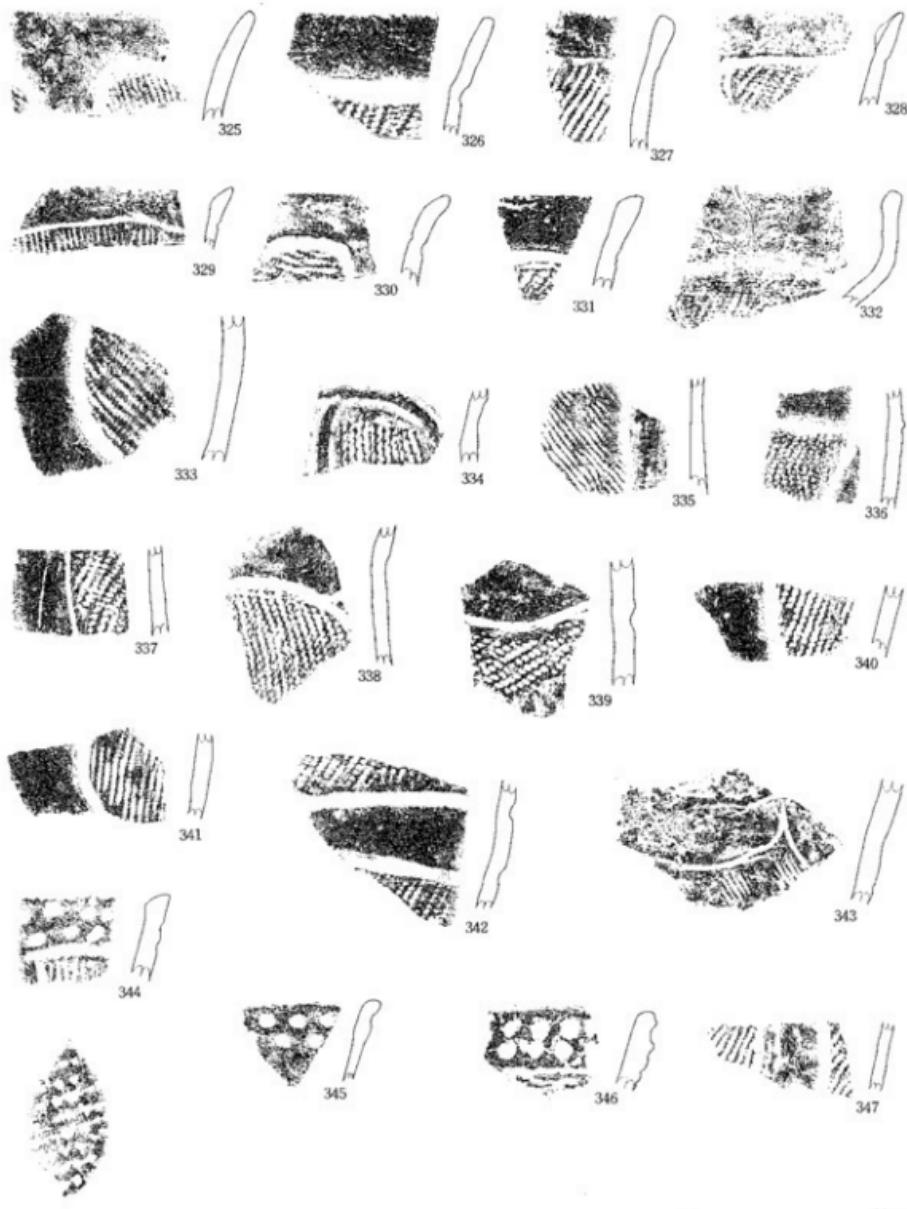


第79図 通構内出土石器・土製品



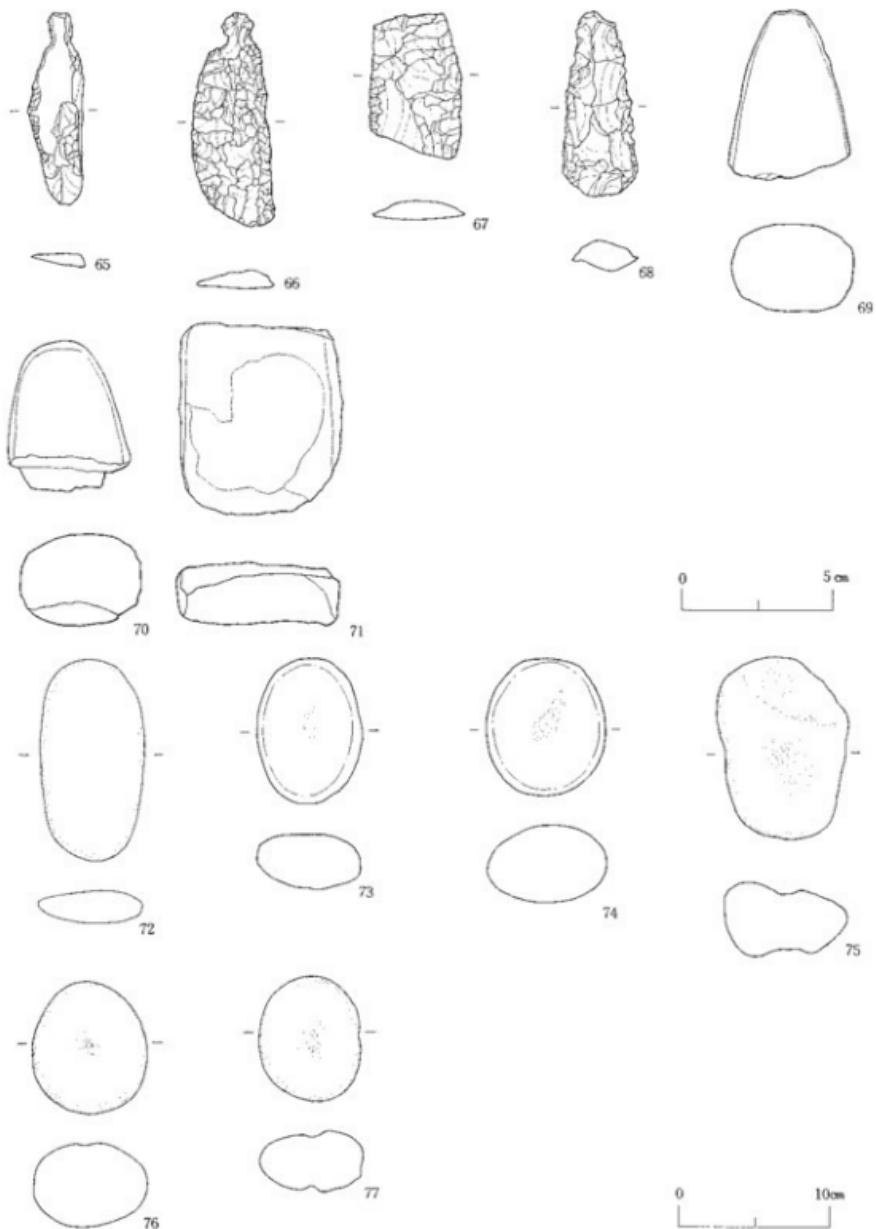
第80図 遺構内出土石器





第81図 通構出土土器

0 10cm



第82図 遺構外出土石器

沈線区画の磨消器で文様が施されている。344～347は磨消器、沈線内に刺突文が施されている。

石器（第82図）

65・66は縦型石匙、67は石匙の破片と思われる。68はヘラ状石器、69～71は磨製石斧である。71は磨滅、風化が著しい。72・73は磨石、74～77はくぼみ石で、75・77は両面使用のものである。

平安時代

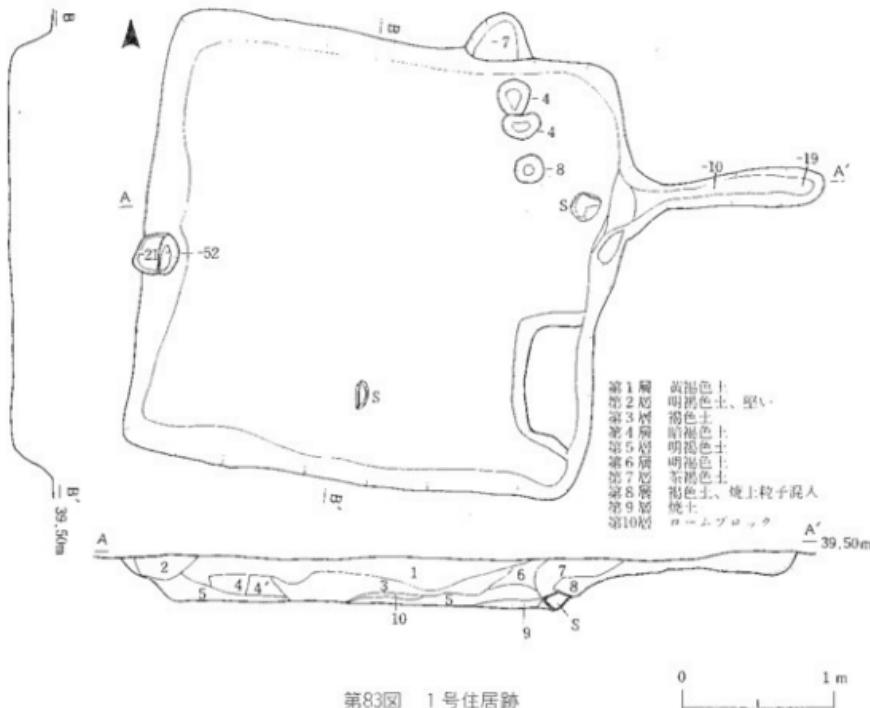
遺構と遺物

本遺跡から、平安時代の遺構として堅穴住居跡3軒、土壙11基が検出された。

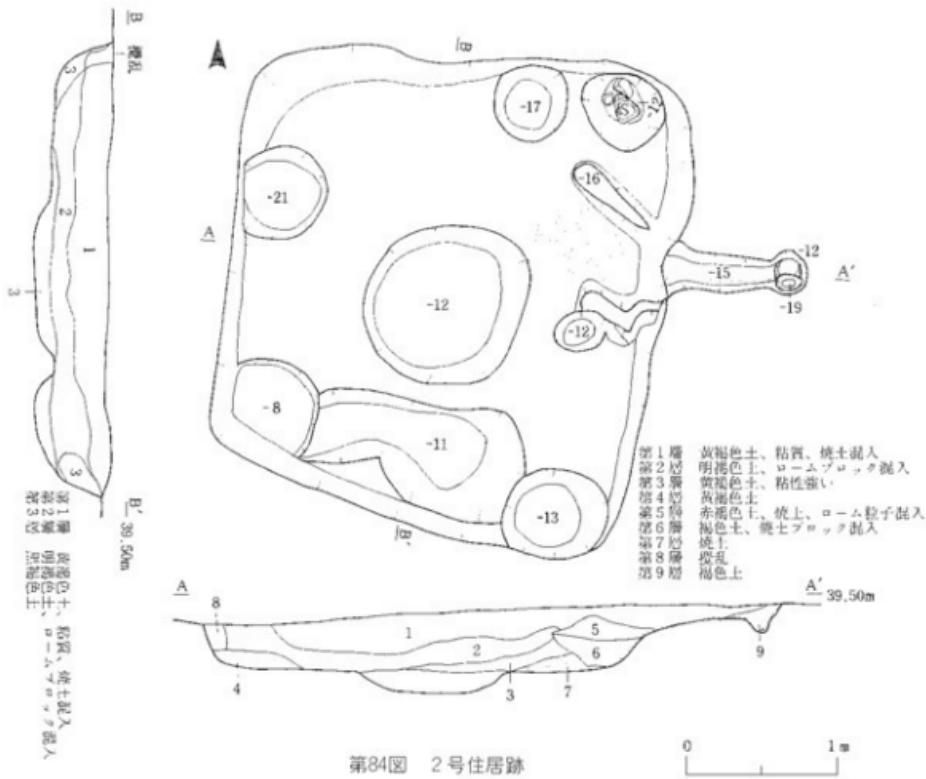
1号住居跡（第83図）

調査区の南部東端で検出された。

プランは径3.1mの方形を呈する。確認面からの深さは35cmで壁は斜めに立ち上がる。ピットは北東部に5個検出されているが主柱穴は不明である。カマドは東壁北寄りに付設されている。両袖部は壊れて不明である。焚口、燃焼部は火熱を受けて焼上が厚く、堅く堆積している。燃焼部には河原石を置いて支脚としている。煙道は長さ1.2m、巾20～25cm、深さ8～15cmであり、底部に



第83図 1号住居跡



第84図 2号住居跡

はうすく焼上が認められる。東壁南側は一段高くテラス状を呈し、堅く踏み固められている。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

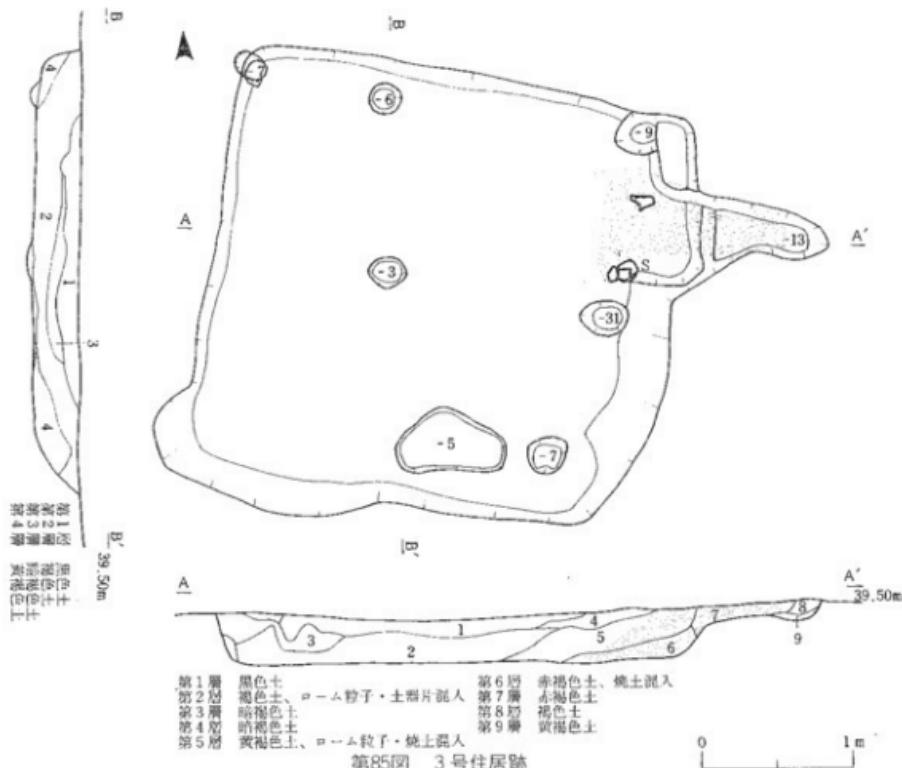
土器 (第 86 図)

1～4は覆土から出土した。1は回転糸切り無調整の赤褐色土器環である。2～4は須恵器環で、2、3は回転糸切り無調整、4は回転ヘラ切り無調整である。

2号住居跡 (第 84 図)

調査区の南部東端で検出された。

プランは長軸 3.1 m、短軸 2.9 m のほぼ方形を呈する。確認面からの深さは約 40 cm で壁は斜めに立ち上がる。ビットは壁下、コーナー部に 6 個検出されている。中央部の円形の大きなビットは本住居跡よりも古いもので、貼り床が施されている。カマドは東壁北寄りに付設されている。両袖は粘土組であるが一部壊れている。焚口、燃焼部は火熱を受け焼土が厚く、堅く堆積している。煙道は長さ 95 cm、巾 35 cm、深さ 10 cm で先端にビットが掘り込まれている。底部には炭化物、焼上が認められる。床面は平坦で堅く良好である。



出土遺物

土器（第86図）

5は北東コーナー部ピット内、6・7は埋土から出土した。5・6は赤褐色土器坏で回転糸切り無調整である。7は回転糸切り無調整の須恵器坏である。

3号住居跡（第85図）

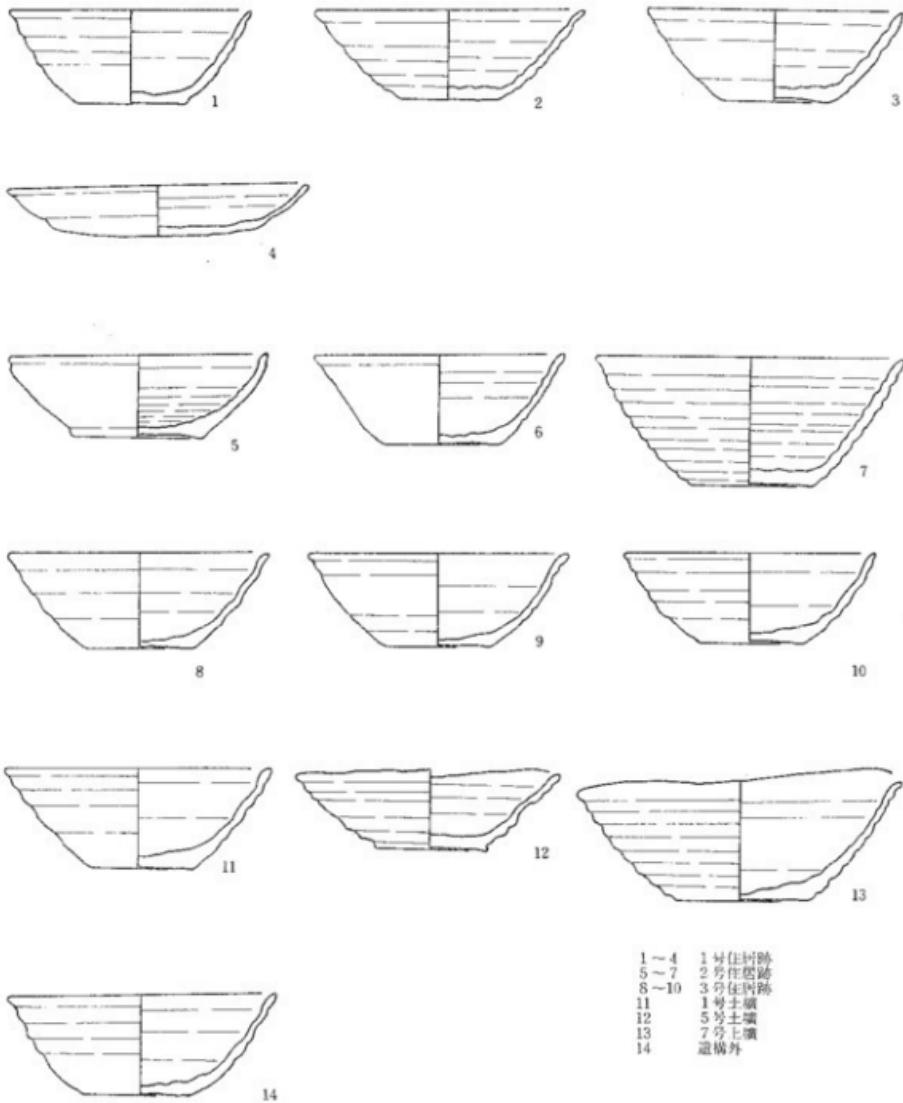
調査区の南部東端で検出された。

プランは径3.0mの方形を呈する。確認面からの深さは40cmで壁は斜めに立ち上がる。ピットは7個検出されているが主柱穴は不明である。カマドは東壁北寄りに付設されている。両袖部は壊れているが、袖に使用された跡が認められる。焚口、燃焼部は火熱を受け焼土が厚く、堅く堆積している。煙道は長さ85cm、巾30～50cm、深さ10cmで焼土が認められる。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第86図）

8～10は床面から出土した。いずれも回転糸切り無調整の赤褐色土器坏である。



- 1~4 1号住居跡
 5~7 2号住居跡
 8~10 3号住居跡
 11 1号土壙
 12 5号土壙
 13 7号上壙
 14 遺構外

第86図 遺構内・外出土土器

土壌出土遺物（第 86 図）

11は 1 号土壌、12は 5 号土壌、13は 7 号土壌から出土した。いずれも赤褐色土器坏で回転糸切り無調整である。12・13は口縁部のつくりが雑で全体に「いびつ」である。

遺構外出土遺物（第 86 図）

14は赤褐色土器坏である。回転糸切り無調整で、ゆるく内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。

まとめ

遺構について

下堤 B 遺跡は、標高約 40 m の西側に広がる台地上に立地する。下堤遺跡は、昭和 43 年から 48 年まで調査が実施されており、本遺跡も昭和 47 年に範囲確認も含めて調査が行われ、堅穴住居跡 4 剛が検出されている。その後、黒土採取などの土取りが広範囲に行われ、東側は破壊されている。今回の調査では、遺構は西端部から検出され、縄文時代中期の堅穴住居跡、フ拉斯コ状ビット、上壙、平安時代の堅穴住居跡、上壙が検出された。ここでは主に堅穴住居跡について簡単にまとめてみたい。

縄文時代中期の堅穴住居跡は総数 45 軒検出され、これまで調査が行われた同時代の遺跡の中では最も多い数である。平面形は、円形 14 軒、椭円形 25 軒、不整円形 1 軒、不整椭円形 2 軒、隅丸方形 1 軒である。規模は、最大の住居跡が長軸 8.5 m、短軸 7.8 m（37 号住居跡）、最小は径 2.3 m（13 号住居跡）と長軸 2.3 m、短軸 2.0 m（21 号住居跡）である。平均すると径 3 m～4 m 前後の住居跡が 20 軒と最も多く、床面積についてプランの不明な 45 号住居跡を除く 44 軒について算出したところ、最大面積を有するのは 37 号住居跡の 52 m²（約 15.8 坪）、最小は 21 号住居跡の 3.6 m²（約 1 坪）である。5 m²～15 m²の範囲に入る住居跡が最も多く、平均値をとると 13.35 m²（約 4 坪）である。炉は不明のもの 3 軒を除き 42 軒から検出されている。地床炉、土器埋設炉、石壠土器埋設炉、複式炉がある。内訳については下記のようである。

地床炉……11 号住居跡

土器埋設炉……38 号住居跡

石壠土器埋設炉……3 号・45 号住居跡

①石壠土器埋設部+堀り込み部……12号・18号・20号・29号・35号住居跡

②石壠土器埋設部+石組堀り込み部……25号・37号・40号住居跡

③石壠上器埋設部+石組堀り込み部+掘り込み部……34号住居跡

複式炉④土器埋設部+石組掘り込み部……10号住居跡

⑤土器埋設部+堀り込み部……1号・2号・4号～8号・13号～15号・17号・22号・23号・26号～28号・30号～33号・36号・39号・41号～44号住居跡

⑥土器埋設部+掘り込み部+堀り込み部……18号住居跡

表1 住居跡一覧

住居番号	平面形	長軸(m)	短軸(m)	床面積(m ²)	周溝	炉の構造	埋覆	時期	備考
1	円形	3.4	—	9.1	無	土器埋設部+掘り込み部	有	大木10	S47 S42JS
2	楕円形	3.9	3.4	10.1	"	" "	"	"	
3	楕円形	2.8	2.6	5.7	"	石頭上層埋設炉	"	"	
4	楕円形	4.8	4.4	16.6	"	土器埋設部+掘り込み部	"	"	
5	円形	6.2	—	30.2	"	" "	"	"	
6	円形	3.5	—	9.6	"	" "	"	"	
7	楕円形	2.9	2.5	5.7	"	" "	"	"	
8	円形	3.4	—	9.1	"	" "	"	"	
9	楕円形	3.4	2.9	7.7	"	—	—	—	—
10	円形	3.0	—	7.1	"	上層埋設部+石組掘り込み部	有	大木10	
11	楕円形	3.8	2.7	8.7	"	地床炉	—	"	覆土・床丸土層から
12	円形	3.2	—	8.0	"	石頭上層埋設部+掘り込み部	有	"	2号土壤に切られる
13	円形	2.3	—	4.2	"	土器埋設部+掘り込み部	"	"	
14	不整円形	3.3	—	8.5	"	" "	"	"	S47 S33JS10A・B
15	円形	4.4	—	15.2	"	" "	"	"	
16	円形	2.6	—	5.3	—	—	—	"	9号土壤に切られる
17	不整椭円形	6.5	6	36.6	"	土器埋設部+掘り込み部	有	"	11号土壤に切られる
18	楕円形	5.2	4.9	20.0	"	石頭上層埋設部+掘り込み部	"		
19	円形	4.5	—	15.9	"	上層埋設部+掘り込み部+掘り込み部	"	"	
20	円形	2.7	—	5.7	"	石頭上層埋設部+掘り込み部	"	"	
21	楕円形	2.3	2.0	3.6	"	土器埋設部+-----?	"		2・3号土壤に切られる
22	楕円形	4.0	3.1	9.7	"	土器埋設部+掘り込み部	"		
23	楕円形	5.3	4.3	17.9	"	" "	"	"	拡張
24	不整椭円形	4.2	3.8	12.5	"	—	—	—	26号土壤に切られる
25	楕円形	3.5	—?	9.6	"	石頭上層埋設部+石組掘り込み部	有	大木10	
26	不整椭円形	4.5	3.8	13.4	有	土器埋設部+掘り込み部	"	"	
27	楕円形	3.4	3.2	8.5	"	" "	"	"	
28	楕円形	4.9	4.6	17.7	"	" "	"	"	
29	隅丸方円	4.4	3.8	13.1	"	石頭上層埋設部+掘り込み部	"	"	
30	楕円形	6.8	5.8	30.9	有	土器埋設部+掘り込み部(Ⅳ期)	"	"	藍鑄
31	楕円形	4.2	3.9	12.9	"	土器埋設部+掘り込み部	有(破片)	"	
32	楕円形	5.6	4.8	21.1	"	" "	有(破片)	"	
33	円形	8.0	—	50.2	"	土器埋設部+掘り込み部(Ⅳ期)	"	"	拡張
34	楕円形	3.9	3.3	10.1	"	石頭上層埋設部+石組掘り込み部+掘り込み部	"	"	
35	楕円形	3.6	3.1	8.7	無	石頭上層埋設部+掘り込み部	有(破片)	大木10	
36	円形	2.9	—	6.6	"	上層埋設部+掘り込み部	有	"	
37	楕円形	8.5	7.8	52.0	"	石頭上層埋設部+石組掘り込み部	"	"	拡張
38	楕円形	4.6	3.5	12.6	"	土器埋設部	"	"	
39	円形	2.7	—	5.7	"	土器埋設部+掘り込み部	"	"	
40	楕円形	7.0	6.4	35.2	"	石頭上層埋設部+石組掘り込み部	"	"	
41	楕円形	5.2	4.2	17.1	"	土器埋設部+掘り込み部	"	"	
42	楕円形	4.6	4.5	16.3	"	" "	有(破片)	"	
43	楕円形	3.1	2.7	6.6	"	" "	有	"	
44	楕円形	3.3	2.8	7.3	"	" "	有(破片)	"	
45	—	—	—	—	石頭上層埋設部	有	大木10	削平塗なし	

以上のように複式炉が圧倒的に多く、石圓土器埋設部 + 石組掘り込み部 + 堀り込み部の組み合せから構成されている。本遺跡では 6 タイプに分類でき⑤タイプが 26 軒と最も多い。

これまで計画地域内の下堤 E 遺跡、湯ノ沢 D 遺跡、坂の上 E 遺跡の調査では、同一住居内で複式炉→石圓炉、複式炉→石圓土器埋設炉、複式炉→土器埋設炉、土器埋設炉→石圓炉という変遷が小例ではあるが確認されている。本遺跡においても同一住居内における炉の作り替えが認められるが、上記のような変遷とは異なり、住居跡の拡張に伴ない炉の位置を移し替え、再構築するものである。住居跡の拡張が明確に認められるのは、23 号・30 号・33 号・37 号住居跡である。23 号・37 号住居跡は複式炉→複式炉、30 号住居跡は土器埋設炉→複式炉、33 号住居跡は複式炉→土器埋設炉→複式炉というように炉の移築が行われ、最も新しい時期に住居規模を拡張し、一回り大きくした壁に掘り込み部が接するようになり、柱穴も新らしく掘り込まれ壁際を固っている。このような形の拡張は地方遺跡の 1 号・2 号住居跡でも確認されている。
(註 4)

この時期の集落では、住居跡間に切り合い関係がほとんどないのが特徴であり、一時期の住居軒数を把握するのが困難である。本遺跡では 45 軒検出した住居跡で切り合い関係にあるものが三組確認されている。このことから少なくとも二時期の変遷が考えられる。

時期については、炉埋設土器を決定的根拠とするならば、沈線区画の磨消帯で文様が施される深鉢形土器が主体であり、縄文時代中期末葉大木 10 式期に位置づけられる。

遺跡の南東部から平安時代の堅穴住居跡 3 軒、土塙が検出されている。住居跡は、いずれも東壁にカマドを付設し、一辺が約 3m 前後で主軸方向も同様のものである。土塙は 11 基検出されている。1 号～4 号土塙は覆土、壌底、側面に焼土、炭化物が多く認められ、火熱を受けている。火を使用した施設と考えられるが詳細は不明である。北東 300 ～ 400 m には同時代の下堤 A、C 遺跡があり、A 遺跡から 4 軒、C 遺跡から 31 軒の住居跡が検出されている。周辺遺跡では、坂の上 F 遺跡 2 軒、湯ノ沢 B 遺跡 1 軒、野形遺跡 3 軒、深田沢遺跡 6 軒（うちカマドのないもの 2 軒）、下堤 D 遺跡 3 軒が検出されている。下堤 C 遺跡が圧倒的に多く同時代の中心的な集落として考えるならば、(註 5)
(註 6)
(註 7)
(註 8)
(註 9)
(註 10)
隣接する下堤 A、B 遺跡の住居跡のあり方は分村的な性格が考えられる。

遺物について

下堤 B 遺跡からは縄文時代中期の土器・石器・土製品・石製品、平安時代の土器などが出土している。ここでは土器について簡単に触れてみたい。

縄文時代中期の土器は、遺跡の北側が削平されており、遺構外から出土した土器は少なく、大部分は住居跡覆土出土の土器片、炉埋設土器である。器種は深鉢が多く、鉢、台壇鉢、器台などがある。文様は沈線区画の磨消帯で施されるものが主体である。口縁部が磨消無文帯で頸部から胴部にかけ「J」、「S」字状文、波状文、クランク状の文様が展開し、また、付随して円・椭円区画内や沈線に沿い刺突文が配される土器もみられる。これらの土器は縄文時代中期末葉の大木 10 式土器として位置づけられているものである。

平安時代の土器は、須恵器環、赤褐色土器環、甕がある。須恵器環は底部切り離しが、回転ヘラ切り無調整 1 点、回転糸切り無調整 3 点である。赤褐色土器環は 10 点すべて回転糸切り無調整である。隣接する下堤 C 遺跡でも同様の土器が多数出土することからほぼ同時期と思われる。赤褐色土器環はすべて回転糸切り無調整であり 9 世紀中半から 10 世紀頃の年代が考えられる。

註 1. 「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤 E 遺跡」秋田市教育委員会 1985

註 2. 「下堤 D 遺跡発掘調査報告」秋田市教育委員会 1982

註 3. 「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 坂ノ上 E 遺跡」秋田市教育委員会 1984

註 4. 「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 地方遺跡」秋田市教育委員会 1987

註 5. 「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 坂ノ上 F 遺跡」秋田市教育委員会 1985

註 6. 「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 湯ノ沢 B 遺跡」秋田市教育委員会 1983

註 7. 「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 野形遺跡」秋田市教育委員会 1984

註 8. 「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 深田沢遺跡」秋田市教育委員会 1985

註 9. 註 2 と同じ

註 10. 「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤 C 遺跡」秋田市教育委員会 1987

参考文献

秋田市教育委員会:「小阿地下堤遺跡発掘調査報告書」1976

秋田県教育委員会:「内村遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第 92 集 1981

秋田県埋蔵文化財センター:「内村遺跡出土土器と住居群の変遷」小林 克 研究紀要第 3 号 1988

芹沢長介 坪井清足他:「縄文土器大成 第 2 卷中期」講談社 1981

目黒吉明:「住居の炉」縄文文化の研究 8 社会・文化 雄山閣出版 1982

中村良幸:「『複式炉』について—岩手県を中心として—」考古風土記第 7 号 1982

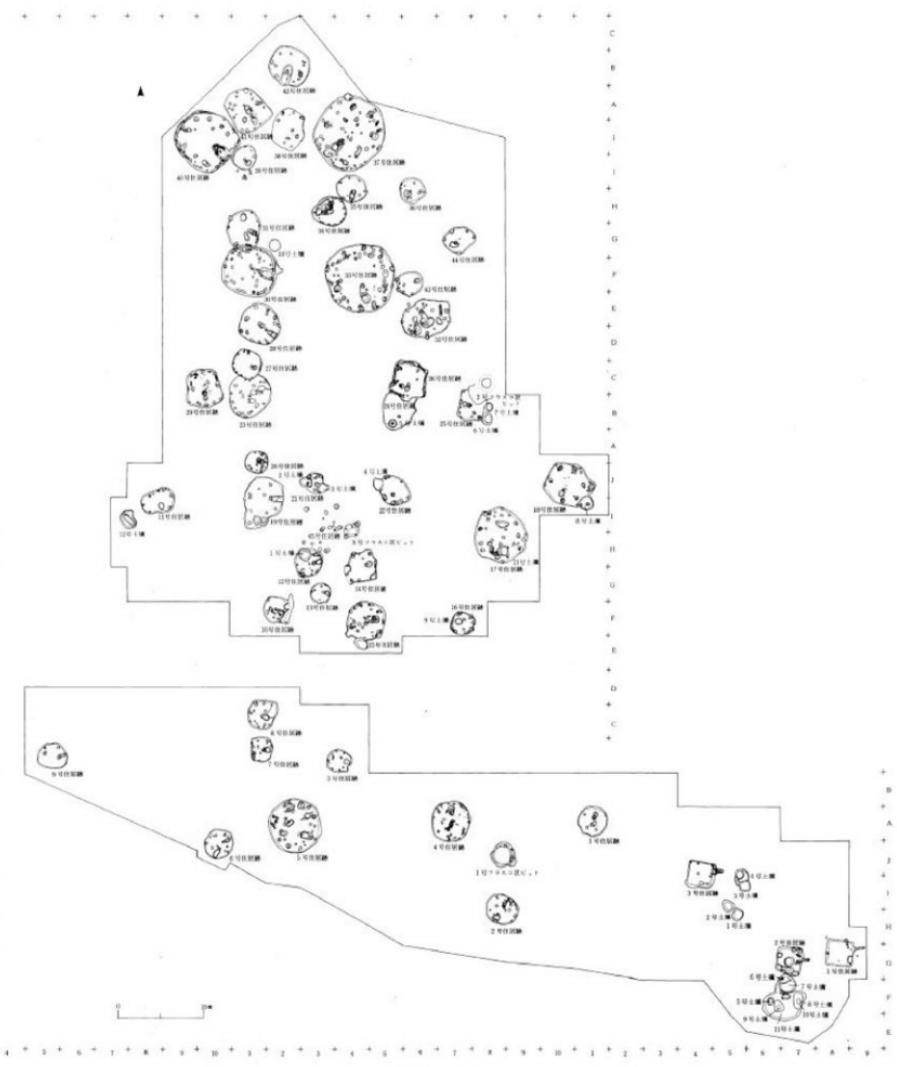
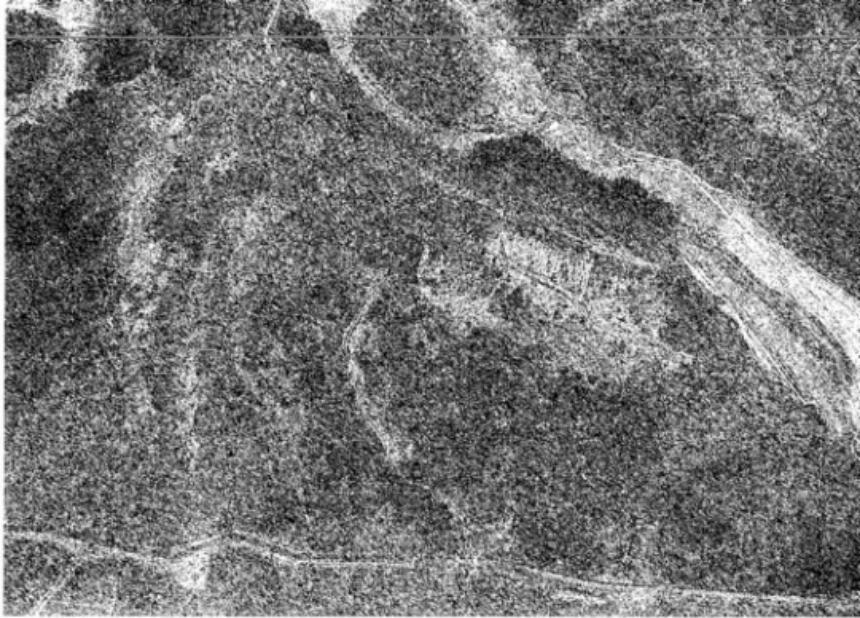


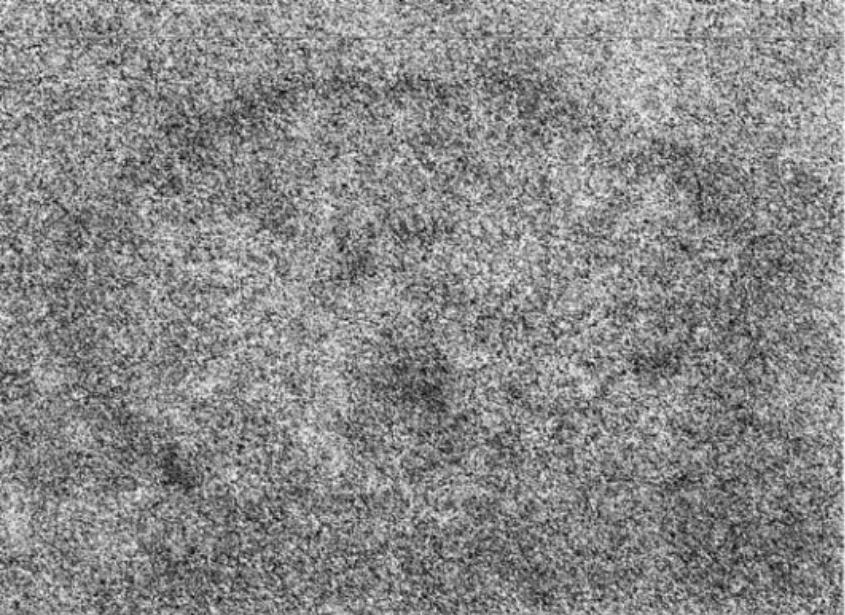
图304 通称灰质图



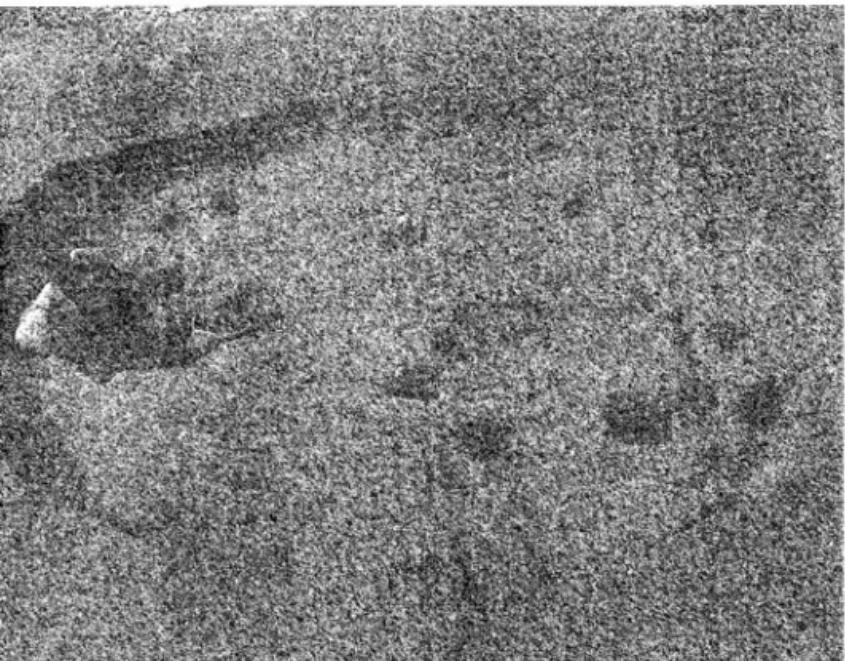
下堤 A・B・C 遺跡航空写真（北西→）



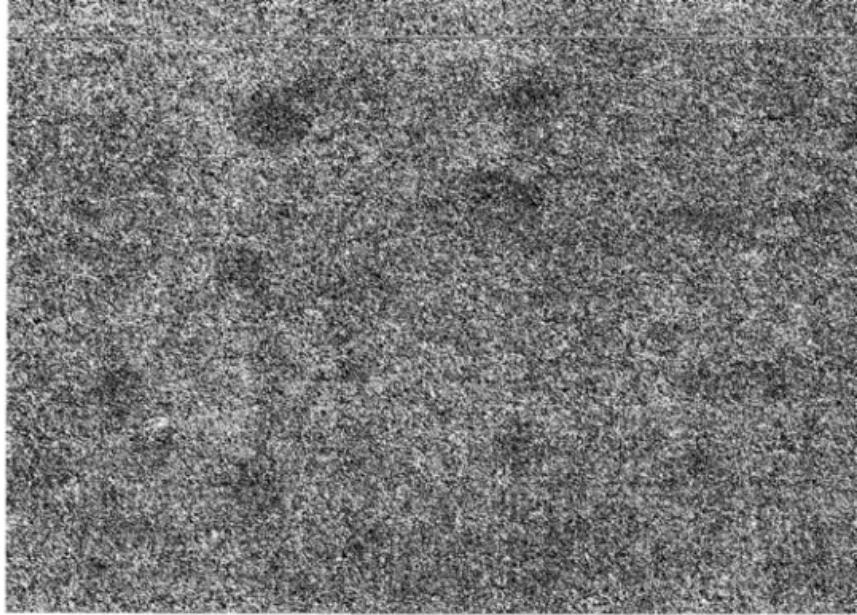
下堤 B 遺跡航空写真（北西→）



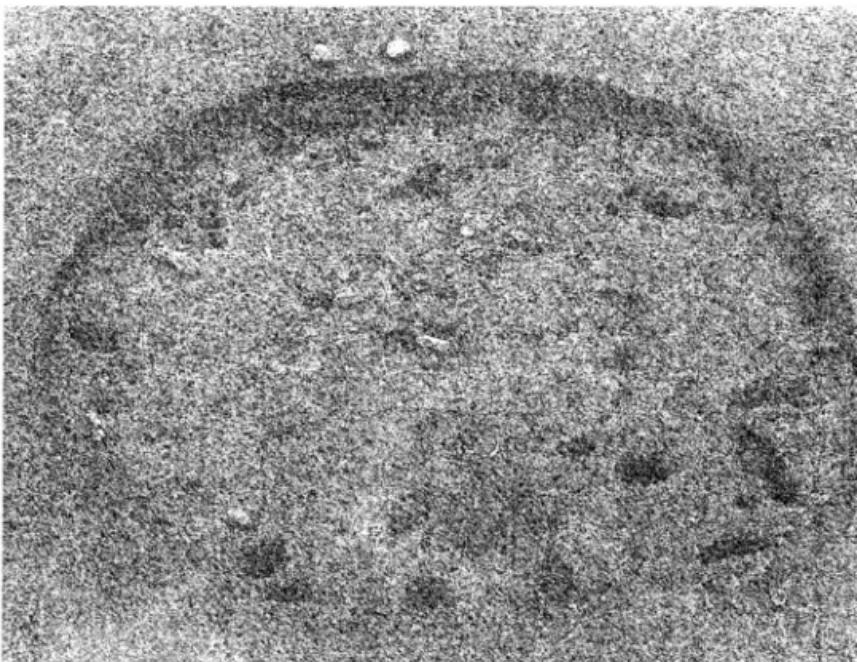
1号住居跡（北→）



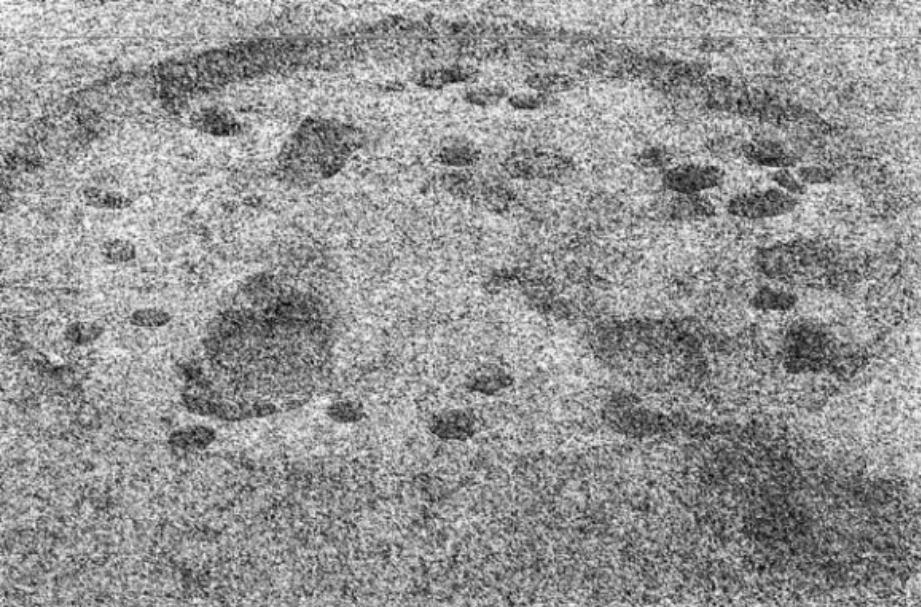
2号住居跡（東→）



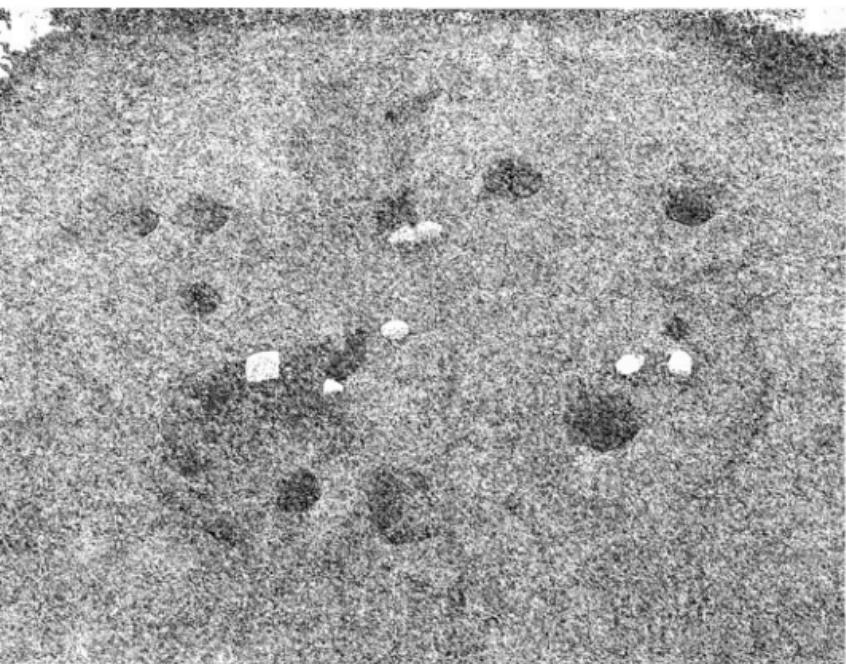
3号住居跡（南西→）



4号住居跡（北→）



5号住居跡（東→）



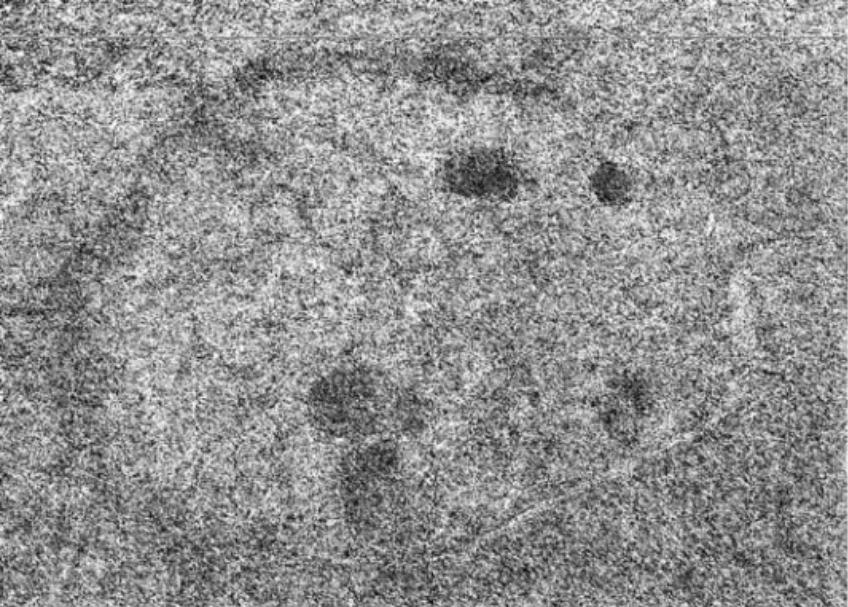
6号住居跡（北→）



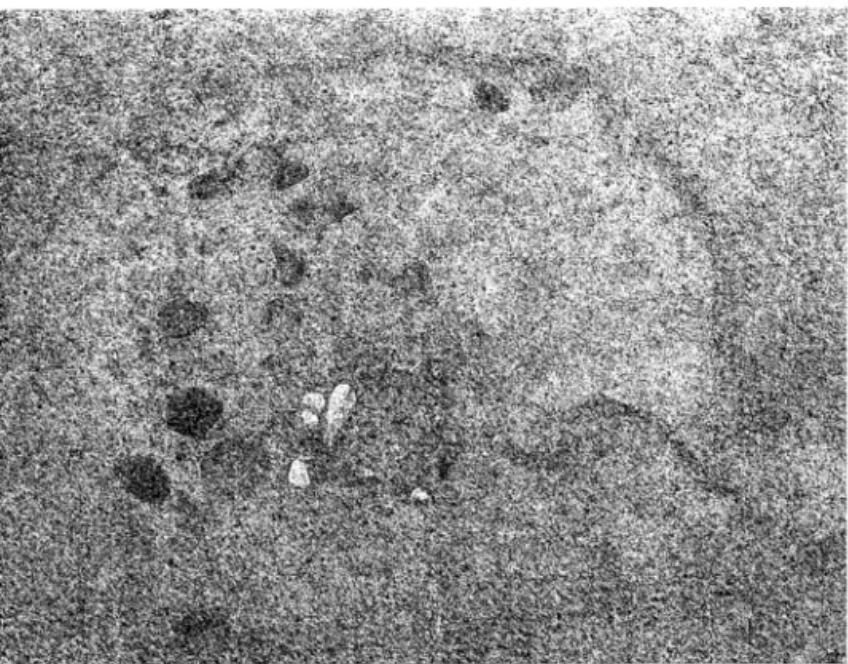
7号住居跡（東→）



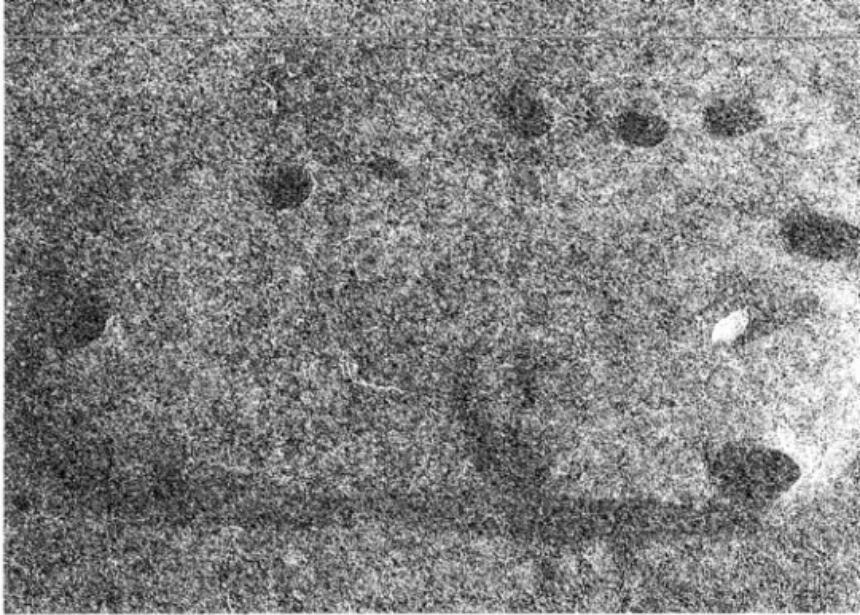
8号住居跡（東南→）



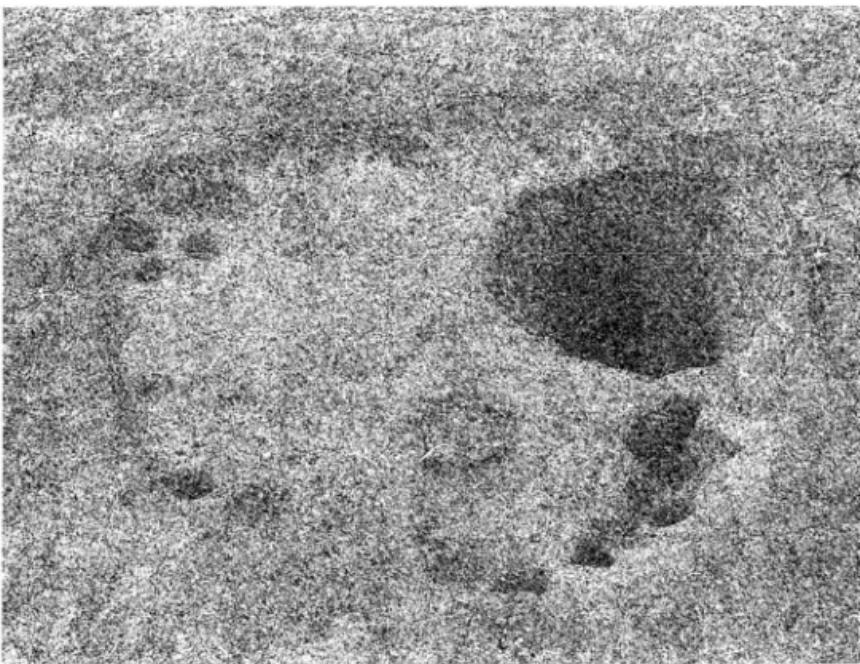
9号住居跡（東→）



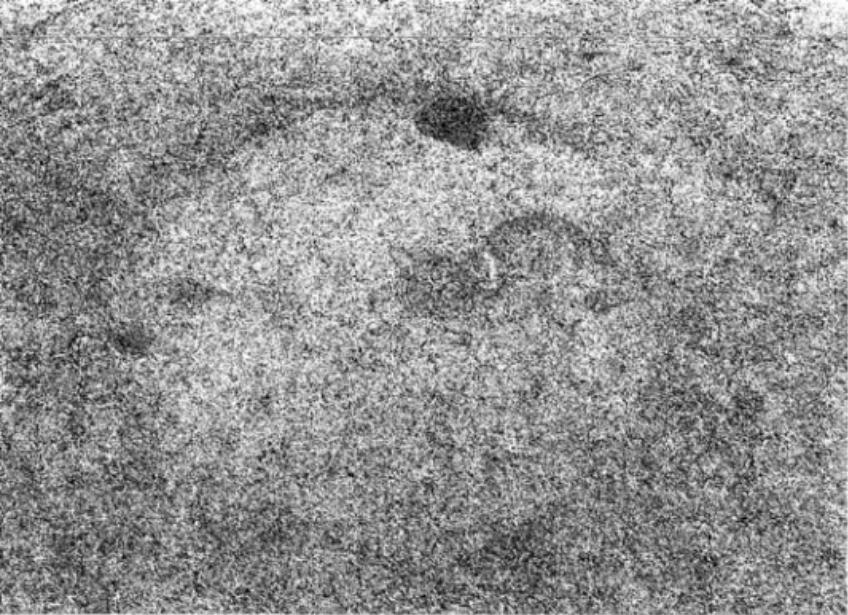
10号住居跡（東→）



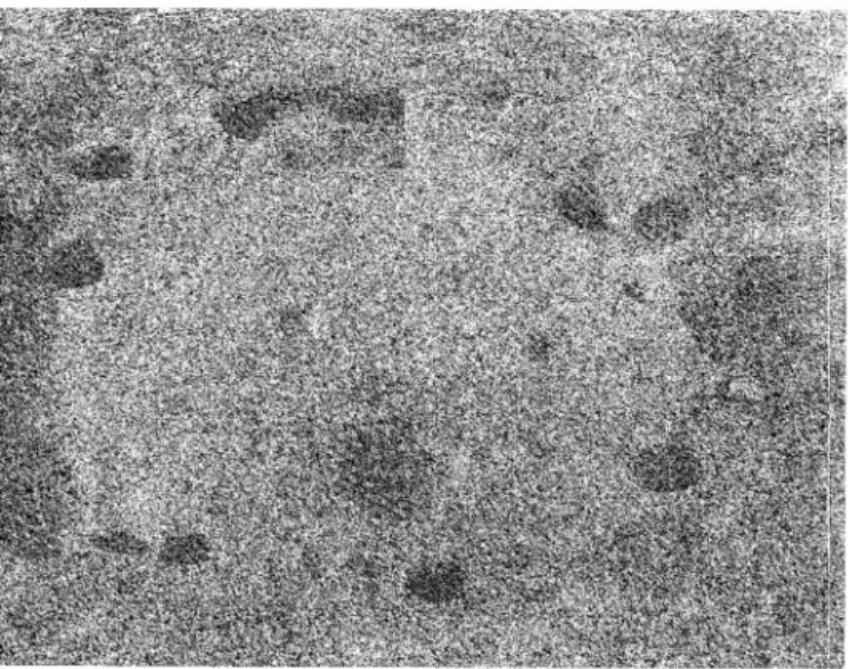
11号住居跡（南→）



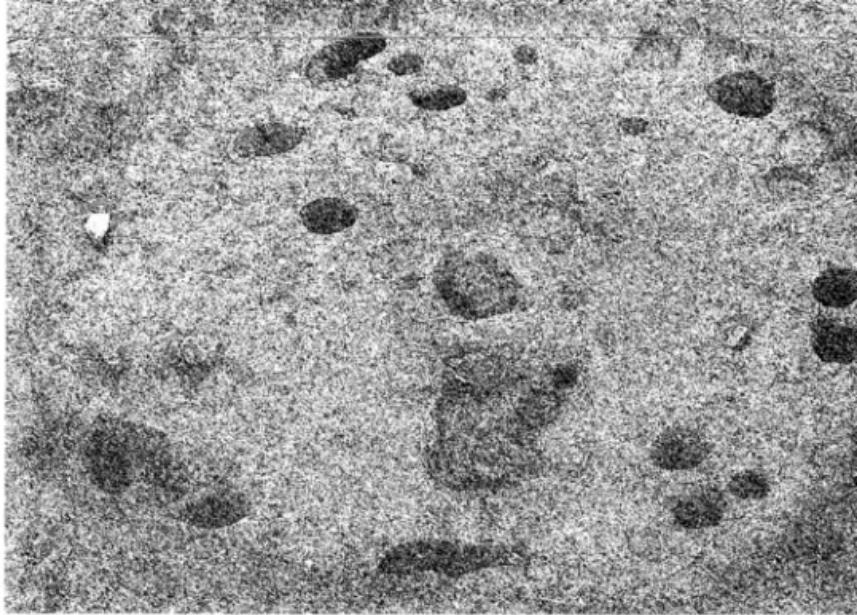
12号住居跡（東→）



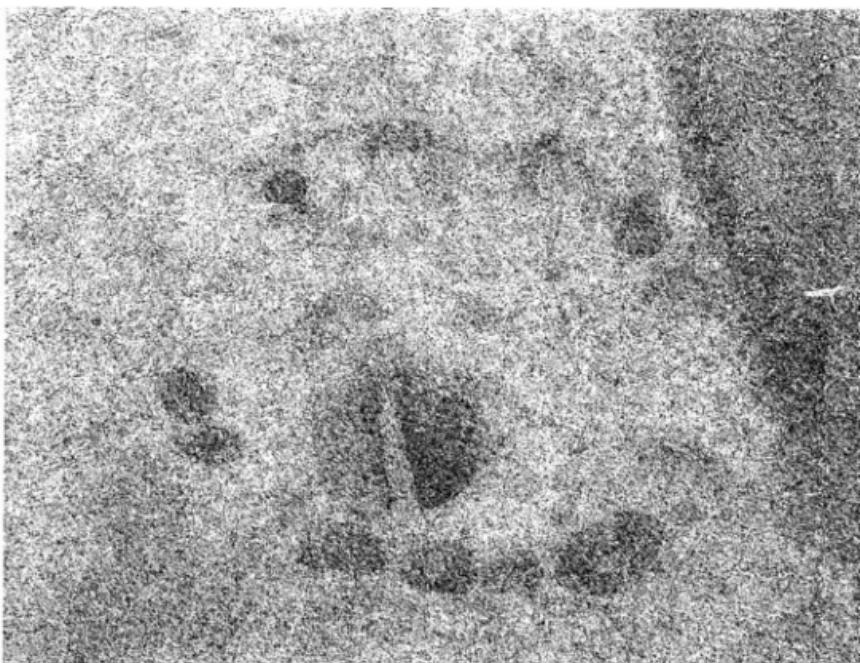
13号住居跡（南→）



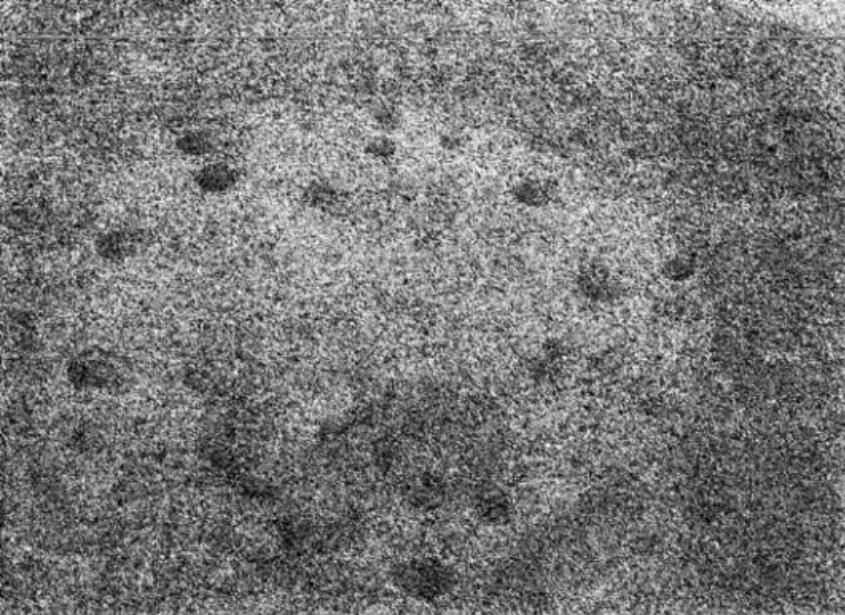
14号住居跡（東→）



15号住居跡（東→）



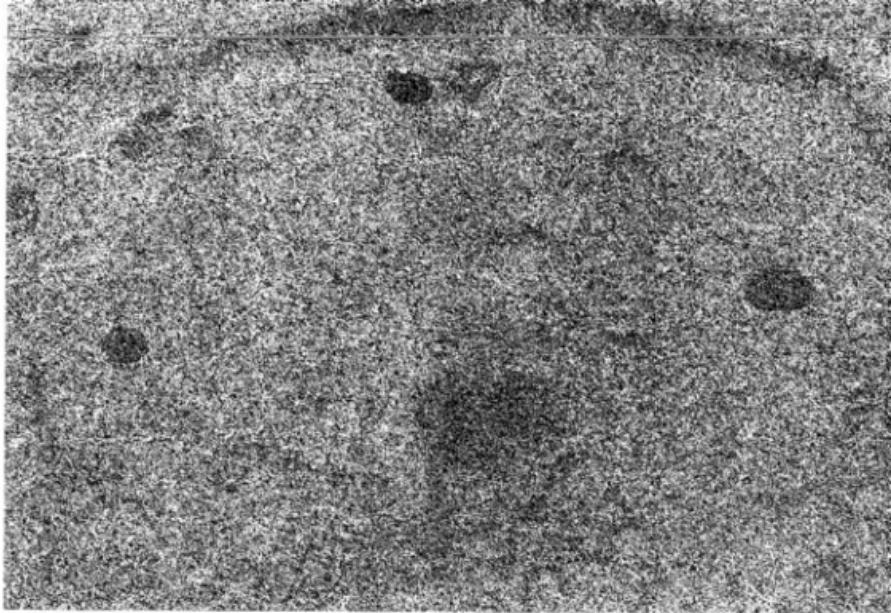
16号住居跡（西→）



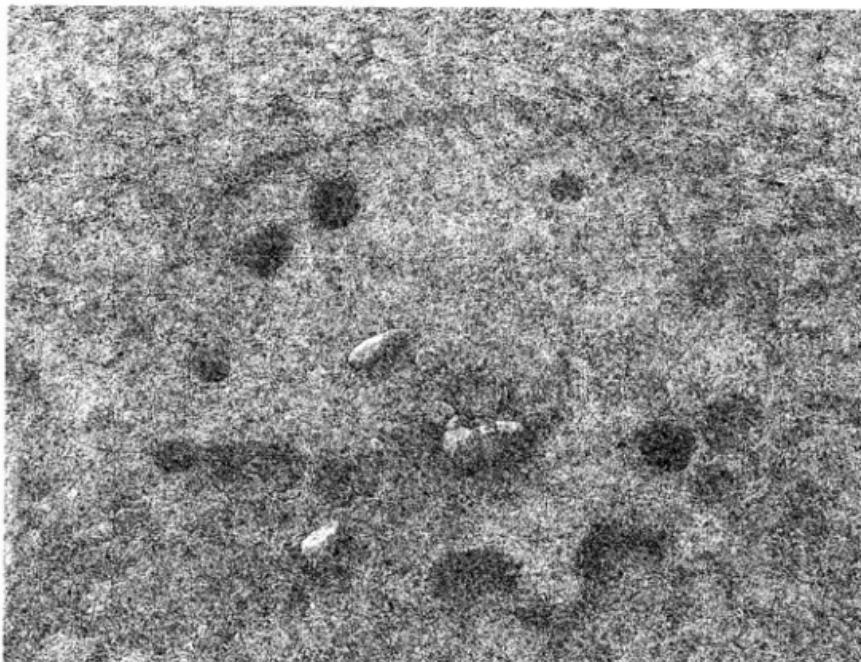
17号住居跡（南西→）



18号住居跡（南西→）



19号住居跡（東→）



20号住居跡（東→）